

# 京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P5718 参照



※ P5722 参照



※ P5727 参照

2022.9

No. 764

## 目次

### [大学の動き]

- 「京都大学創立 125 周年記念行事」を開催 ..... 5718
- 理事が発令される ..... 5721

### [部局の動き]

- 第 24 回リカレント教育講座『心の教育』を考える  
- 思春期と SNS -」を開催 ..... 5722
- 京都大学研究資源アーカイブが「田中淡建築庭園写真, 1967-2003」を公開 ..... 5723
- 第 8 回アフリカ開発会議サイドイベント「日本アフリカ大学交流・学長円卓会議」に河野泰之副学長が参加 ..... 5724

### [寸言]

- 「計画性」or「チャレンジ&チェンジ」? 島田 雅文 ..... 5725

### [随想]

- 研究所の寿命  
名誉教授 田中 耕司 ..... 5726

### [洛書]

- 人々の生きた歴史から学ぶ防災 落合 知帆 ..... 5727

### [探訪]

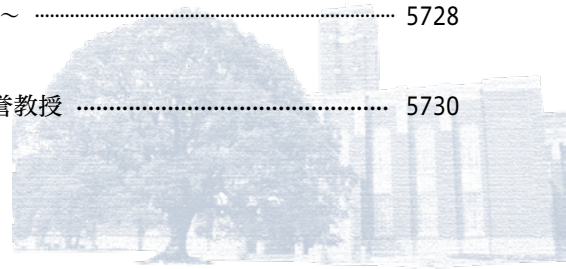
- 理学研究科附属天文台 飛騨天文台  
~ 広報課員が行く ~ ..... 5728

### [訃報]

- 庄野 達哉 名誉教授 ..... 5730



京都大学



## 「京都大学創立125周年記念行事」を開催

2022年に創立125周年の節目を迎えたことを記念して、創立記念日である6月18日(土)と翌19日(日)の両日、ロームシアター京都にて、京都大学創立125周年記念行事を開催しました。(記事中の人物の肩書は当時のものを記載しています)

### 《6月18日(土)》

#### ●記念式典

初日には、来賓、招待者を迎えて記念式典を挙行了しました。本学修了生の野村正育氏(NHK放送研修センターアナウンサー)の司会により進められ、はじめに、湊 長博 総長が式辞として、列席者ならびに本学を支援いただいている全ての方への謝意と新たな四半世紀に向かう本学の目標を述べました。次に、田中英之 文部科学副大臣、澤田 純 京都大学鼎会会長・日本電信電話株式会社代表取締役社長 社長執行役員、井村裕夫 京都大学第22代総長から祝辞がありました。

続いて、来賓紹介、祝電披露が行われ、最後は学歌静聴で厳かな雰囲気の中、幕を閉じました。



記念式典の様子



記念式典で挨拶する湊総長

#### ●記念フォーラム

式典に続いて行った記念フォーラムでは、冒頭に本学に関わるノーベル賞受賞者11名とフィールズ賞受賞者2名が映像で紹介された後、「真理の探究と地球規模の課題解決」を統一テーマに、ノーベル賞受賞者の野依良治氏、小林 誠氏、山中伸弥 iPS細胞研究所名誉所長・教授、本庶 佑 医学研究科附属がん免疫総合研究センター長・高等研究院副院長・特別教授、吉野 彰氏、利根川 進氏による講演、ビデオメッセージがありました。講演後は、湊総長をファシリテーターとして受賞者4名とパネルディスカッションを行い、若い世代にエールを送りました。フォーラムには本学の学生や全国の高校生も含めて約1,000名を招待し、ライブ配信でも多くの方の視聴がありました。



記念フォーラムでのパネルディスカッション

大学の  
動き

●OB・OG 講演会

記念式典に先立ち、OB・OG講演会を開催しました。オリンピックやプロスポーツの世界で活躍した経験を持つ本学体育会出身者による「アスリート魂～勉学とスポーツ、そしてその先へ～」を統一テーマとした講演を行いました。会場には、一般市民、高校生など約180名の参加者が集いました。



OB・OG 講演会の会場の様子

●アカデミックマルシェ

会場の野外イベント用の広場では、アカデミックマルシェを開催しました。本学の最先端の研究展示や体験コーナー、同窓生が活躍する企業による125周年記念商品の限定販売ブースが並びました。研究展示や体験コーナーを楽しむ家族連れや記念商品を買求める市民など、延べおよそ7,800人の人出で賑わいました。



多くの人出で賑わった会場

多くの家族連れが楽しんだ研究展示・体験コーナー

《6月19日(日)》

●アカデミックデイ

2日目には、本学名物イベントである「京都大学アカデミックデイ2022～創立125周年記念～」を開催しました。30組以上、100名を超える本学の研究者が一堂に会し、子どもから大人まで多くの人々が対話の場に訪れました。研究者と参加者が一つのちゃぶ台を囲んで対話するコーナーや異分野の研究者が議論を交わすクロストークなどがあり、会場は研究者との対話を楽しむ多くの参加者で賑わいました。

大学の  
動き



多くの人が訪れた会場の様子



ちゃぶ台を囲んで研究者との会話を楽しむ参加者

●体育会学生主催イベント

同日午後には開催した学生主催イベントでは、体育会に所属する全55団体の個性あふれる紹介動画の上映、体育会出身の森田鉄兵氏（Bリーグ京都ハンナリーズ代表取締役社長）、新実彰平氏（関西テレビ報道番組キャスター）および現役学生2名による座談会、応援団による演舞といったプログラムで、会場を沸かせました。また、参加者約300名からの投票により、紹介動画の最優秀作品が決定しました。



最優秀作品に輝いたラグビー部



会場を盛り上げた応援団の演舞

●記念音楽会

本記念行事の最後に、本学卒業生の音楽家であるソプラノ歌手・飯田みち代氏、チェリスト・谷口賢記氏と京都市交響楽団の共演による記念音楽会を開催しました。指揮に広上淳一氏、ピアノにイリーナ・メジャーエワ氏を迎え、本学卒業生の酒井千佳氏の司会のもと、ハイドンの「チェロ協奏曲第1番」、ヴェルディのオペラ「椿姫」など、全5曲を披露し、ステージの合間には卒業生3名によるトークセッションも繰り広げられました。1,000名を超える聴衆は、華やかな顔ぶれによる迫力ある演奏を堪能しました



音楽会の様子



トークセッションの様子

[目次に戻る](#)

## 理事が発令される

7月1日付けで新たに理事が任命されました。任期は令和6年6月30日まで。



総務, 労務, 人事, 危機管理担当  
申田 俊巳 (新任)

[目次に戻る ↗](#)



## 第24回リカレント教育講座「『心の教育』を考える－思春期とSNS－」を開催

教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、年1回、教育相談活動に携わる専門家（幼稚園、小学校、中学校、高校教諭、養護教諭、児童養護施設関係者、心理臨床専門家等）を対象に、研修活動の一環として、リカレント教育講座を開催しています。

本講座は、不登校、非行、いじめ、発達障害など、現代の教育現場で大きな問題となっている現象を通じて、子どもの心や教育について深く考えることを狙いとして、これまで開講しており、例年、全国から熱心な教師や臨床心理士等専門家の参加を得てきました。

第24回となる今回は、「思春期とSNS」を全体テーマとして、7月24日（日）に百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて開催し、80名が受講しました。新型コロナウイルス感染症の影響により2019年以来の開催となり、感染防止対策を徹底して実施しました。

午前は、学生相談と医療の現場を中心に臨床心理士として活躍する2名のシンポジストを迎え、「思春期とSNS」をテーマとしたシンポジウムを実施しました。現代の子どもたちとSNSやインターネットとの関係性や、SNSカウンセリングが必要とされる社会背景、インターネットやゲームへの依存に必要な対策など、幅広い視点での講演となりました。その後は、受講者を交えたディスカッションが活発に行われました。

午後は、4つの分科会に分かれて事例研究を行いました。事例研究では、教育現場における個別事例を素材として、受講者と講師との間でさまざまな意見が交わされました。参加者からは、「久しぶりにゆっくりと事例検討を行うことができ、有意義な時間でした」、「さまざまな方の意見を聞くことができ、自身の臨床の参考としていきたいと思いました」などの感想が寄せられました。

本講座は、教育現場における心の問題を検討していく場として、来年度以降も引き続き開催していく予定です。



会場の様子

(大学院教育学研究科)

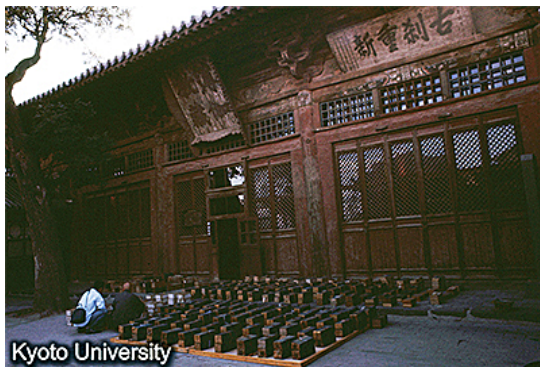
[目次に戻る ↗](#)



## 京都大学研究資源アーカイブが「田中淡建築庭園写真，1967-2003」を公開

京都大学における教育や研究のプロセスで収集または作成された資料群を、アーカイブズとして永続的に学内外で利用可能にする取り組みである京都大学研究資源アーカイブが、「田中淡建築庭園写真，1967-2003」を公開しました。

本資料群は、田中 淡 名誉教授（1946-2012）が、中国建築・造園史の学術調査において撮影した建築・庭園遺構等の写真、および野帳等で、主に1971年から74年に文化庁文化財保護部文部技官として建造物の調査修理に携わった時期から、京都大学人文科学研究所在職中の2003年までの調査研究の記録です。1970年代から1990年代に在外研究や学術訪問団で中国大陸を訪れた際の調査記録が中心で、日本、台湾、韓国、イラン、アフガニスタン、ヨーロッパ等での記録や、1960年代の学生時代の記録も含まれています。



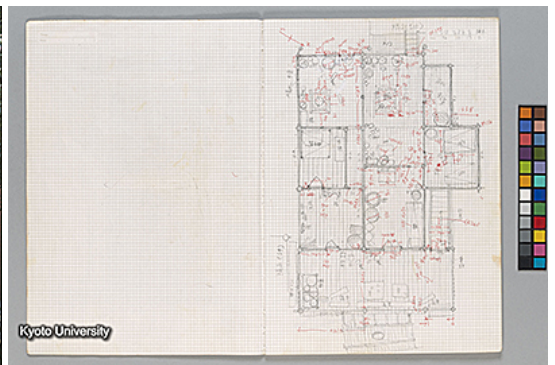
下華厳寺薄伽教蔵殿（1975年撮影）  
資料情報：117\_下華厳寺薄伽教蔵 正面，  
IRHu MIXED 2018/2/S1/002/0118，  
“田中淡建築庭園写真，1967-2003，”  
京都大学（資料所蔵：京都大学人文科学研究所，  
データ提供：京都大学研究資源アーカイブ）。



下華厳寺薄伽教蔵殿（1981年撮影）  
資料情報：34-11\_大同 下華厳寺 薄伽教蔵殿\_81，  
IRHu MIXED 2018/2/S1/013/0168，  
“田中淡建築庭園写真，1967-2003，”  
京都大学（資料所蔵：京都大学人文科学研究所，  
データ提供：京都大学研究資源アーカイブ）。



下華厳寺薄伽教蔵殿（1992年撮影）  
資料情報：794\_下華厳寺薄伽教蔵殿，  
IRHu MIXED 2018/2/S1/063/0174，  
“田中淡建築庭園写真，1967-2003，”  
京都大学（資料所蔵：京都大学人文科学研究所，  
データ提供：京都大学研究資源アーカイブ）。



貴州トン族住居平面図（1990年）  
資料情報：[貴州トン族調査 1990年10月（H2年）]，  
IRHu MIXED 2018/2/S5/259，  
“田中淡建築庭園写真，1967-2003，”  
京都大学（資料所蔵：京都大学人文科学研究所，  
データ提供：京都大学研究資源アーカイブ）。

〔出所・資料作成〕 田中 淡（たなか・たん）

〔資料年代〕 1967年～2003年

〔目録作成〕 2021年

〔数量〕 ポジ・フィルム約30,000点，ネガ・フィルム約16,500点，アルバム17冊，紙焼き約4,000枚，ノート31冊



[メタデータ] 30,449 レコード

【関連リンク】

京都大学研究資源アーカイブ

<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>

田中淡建築庭園写真, 1967-2003.

<https://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/archives/2294/>

(総合博物館)

[目次に戻る ↗](#)

## 第8回アフリカ開発会議サイドイベント「日本アフリカ大学交流・学長円卓会議」に河野泰之 副学長が参加

8月22日(月)にオンラインで開催された「日本アフリカ大学交流・学長円卓会議」に、本学を代表して河野泰之 副学長(国際戦略担当)が参加しました。

本会議は、チュニジアで開催された第8回アフリカ開発会議(TICAD8)のサイドイベントとして、日本とアフリカ諸国の大学間連携を促進し、人的交流を活性化する目的で開催されたものです。日本およびアフリカ諸国の大学の学長・副学長21名が一堂に会し、各大学における学術交流や人材育成の取り組みが紹介されました。

河野副学長は「Kyoto University's Engaged Research in Africa」と題して、半世紀にわたるアフリカでの本学の研究教育活動について発表しました。本学のアフリカでの研究は、現地住民の知恵と科学的手法を融合させながら、ともに問題の解決に取り組むものが多い点を強調しました。

今後も、大学間の学術交流を通じて、日本とアフリカを架橋する人材が増えることが期待されます。



発表を行う河野副学長



アフリカにおける研究事例の紹介

(学術研究支援室)

[目次に戻る ↗](#)



# 「計画性」or「チャレンジ&チェンジ」？

島田 雅文



僕が在学した当時の文学部は、学生運動の真っ只中であって、4年間はストの連続で、ほとんど授業はありませんでした。

学生時代の記憶は、アルバイトと遊びしか残っていませんし、就職もアルバイトの延長線で考えていたようで、当時は全く無名のリクルートに入りました。

いい加減な選択だったかも知れませんが、そのリクルートが、今のような立派な大きな会社になるとは、思いもよりませんでした。

そのリクルートでは、急速な成長を自らも一緒に体験し、あのリクルート事件でも、僕自身も当事者として経験するなど、いろいろな勉強をさせていただきましたが、49才の時に、日本初の「従業員参加型のMBO」を実行し、リクルートから独立して89人の仲間たちと現在のザイマックスを誕生させました。

そのザイマックスも、22年の年月を経て、ここでもまた、自分でも想像もできなかった規模の会社への成長を体験しました。

自分の置かれた環境や立場も、時間とともに大きく変わって行きますが、人との交友関係でも、大学にはほとんど行ってない僕ですから、学生時代には知り合うこともなかった先輩・後輩の方々と、近年になって驚くほどたくさん知り合うようになったことも、びっくりする事象です。

僕たちのような昭和世代は、世の中がどんどん変わっていくことが当たり前と考えていた世代でしたから、計画的に人生を考えることよりは「今、やりたいこと」にチャレンジする人が多かったように思えます。

大学に行ってなかった僕が言うのも変ですが、京大にはそういう人が多いと思っていました。

最近では、世の中全般、当社に入って来る若者のみなさんを見ても、人生を計画的に考える人が多くなって来て、ビジネスでも計画性を優先して考える人が増えて来ているように思えます。

「キャリアプラン」って言葉が一時流行りましたが、そんなことより、人生やビジネスを「チャレンジ&チェンジ」と考える人が増えないのは残念です。

やってみて、あかんと思ったら、すぐに「路線変更」すればいいやんと開き直る「チャレンジャー」がたくさんいるのが京大の伝統だと勝手に思っていますし、また、そうであって欲しいと願っています。

わが母校（…と言えるのかな）、京大も125周年を迎えましたが、僕は、自分自身の「奇跡の生還」から、今年、50年を迎えました。

在学中の1972年5月に、乗鞍で、車ごと崖下62メートルに転落する自動車事故を起こし、幸いにも奇跡的に生き延びて、ローカル紙に「奇跡の生還者」と報道されました。

世の中にも、自分自身にも、何が起こるか分からないのが、「この世」です。

計画的に生きるのはむずかしい「この世」を、大胆にチャレンジする「京大気質」みたいなものを、ほとんど大学にも行かなかった僕が、持ち合わせていた幸運に感謝しています。

(しまだ まさふみ、株式会社ザイマックス代表取締役会長兼 CEO、昭和49年文学部卒業)

[目次に戻る ↗](#)

## 随想

## 研究所の寿命

名誉教授 田中 耕司



学生時代を含め50年ものあいだ京都大学にお世話になった。その過半を東南アジア研究センター（現東南アジア地域研究研究所，以下，東南ア研）で過ごしたので，附置研究所や研究センターの在り方を考える機会が多くあった。「研究所に寿命があるか」という問題もその一つだった。

東南ア研の設立後ほぼ20年が経った1980年代半ばころ，この話題に花が咲いたことがある。ソ連のある研究所が50周年を迎えたとき，“研究所の寿命は一般に50年と言われるが，本研究センターは皆さんの努力のお蔭で次の50年に向かおうとしている”という趣旨の所長挨拶のあったことがその議論の発端だった。

「明確なミッションをもって設立されたのだから，50年もすればその成否が明らかになる。だから，おのずと寿命はある」というのが「50年寿命説」に共鳴する所員の意見だった。どんな組織にも若くて元気なときと老成するときがある。組織の解体・再編を視野に入れるべしという考えだったのだろう。いっぽう「そうは思わない。寿命など意識せずに好きな研究に没頭していればいい」と言い，能力をもった研究者が研究組織を支えるのであって，その命題自体が間違っていると主張する所員もいた。

結論が出る議論ではもちろんない。当時，いったん設置されれば学内組織は比較的安定していた。教員の身分も安泰だった。だからこそ，茶飲み話としてこういう話題が議論できたのだろう。しかし，その後は，茶飲み話ではすまない時代になってしまった。

その走りは，大学院重点化だったように思う。地域研究の分野ではアジア・アフリカ地域研究研究科が設置され，その協力組織として教育に積極的にかかわるようになった。研究に加えて教育というミッションが加わることになった。そして，その後すぐにやって来たのが国立大学の法人化だった。

法人化の推進が閣議決定された年に東南ア研の所長に任命されたために，附置研究所や研究センターの全国規模での業績評価に取り組みねばならなくなった。評価次第では組織の再編もありうるという触れ込みまであって，部局長だけでなく所員の多くが，俄然，忙しくなった。2004年の国立大学法人への移行までの数年間は，いま思い返しても辛い時代だった。

法人化を経て，東南ア研は研究組織としての規模を大きくできた。組織の生き残りにはひとまず成功したと言えよう。「50年寿命説」を議論したころの所員はすべて退職したが，2015年には50周年を祝うことができた。ただ，法人化以降，研究者の研究活動以外の業務量がますます増えたのも否めない。競争的資金の獲得と管理，社会貢献，自己点検や外部評価などに相当な時間を費やしているという。

いまは傍観する立場でしかないが，組織の「健康診断」に忙しくてその「寿命」を縮めるようなことがないようにしてほしい。ましてや，研究者コミュニティとは全く関係のないところから「もう寿命ですよ」などと言われるような時代が来ないよう願っている。

（たなか こうじ，平成27年退職，  
元東南アジア研究所教授・白眉センター長，専門は東南アジア研究）

[目次に戻る ↗](#)

## 洛書

人々の生きた歴史から  
学ぶ防災

落合 知帆



私はこれまで様々な土地の消防団員や漁師、石工たちを追いかけながら、地元に着した持続可能な地域防災のあり方を考えてきた。印象深い地ばかりではあるが、中でも2004年スマトラ島沖地震とインド洋津波の被災地であるインドネシアのバンダアチェを12月26日の災害発生日から数週間後に訪れた際の光景は、今でも私の目にそして心に焼き付いている。モスク以外のすべてが洗い流された街や太い鉄筋コンクリートが折れ曲がる姿に自然の驚異的な破壊力を見るとともに、まとわりつくような暑さの中、人々の涙と笑顔に人間の力強さを感じた時を忘れることは出来ない。私が災害と地域社会についてより深く知りたいと考えるようになったきっかけであり、今でも研究の原動力になっている。

私が所属する地球環境学堂は今年で設立20周年を迎えた。文理融合を掲げスタートした本大学院には異なる分野の教員たちが所属している。ここで中世史の研究者と出会い、古文書を読み解くことで400年以上前から行われていた防災対策の知識を得た。また、森林や里山の研究者からは土砂災害が危惧される地域の植生や人々の自然資源の利用法について学んだ。地域の高齢者に話を聞くと、ほんの少し前（それでも昭和30-40年頃）まで江戸時代と大して変わらない自然管理や災害対策が行われていたことに驚く。災害の規模、要因や影響が多様化する現代において、防災にはより多くの分野の視点が必要だと実感している。

近年、各地で地震や水害が頻発し、多くの被害が出ている。日本社会の大きな転換点となった災害の一つに、来年発災後100年となる関東大震災がある。私は数年前から震災当時日本に数万人いたとされる外国人が残した日記や手紙などを海外の図書館から探しだし、彼らの目から見た震災の様子を明らかにしようと研究を進めている。異国の地ですべてを失うも、彼らは迅速に各地の被災状況を把握し、ビジネスを再建しようと動いたり、母国からの支援を募ったりしている。数々の資料から当時の外国人の行動力や連帯力が伝わってくる。いつの時代も変わらない自然災害を乗り越える人々の知恵や努力、力強さを感じる。

さて、話は変わるが私の居室からは大きなスギの木が見える。赤レンガの建物の2階を優に超える巨木の横には小さな石標が置かれ「田邊朔郎寄附 大正元年 ヒマラヤ（一部記載内容不明）」とある。ご存じの通り、田邊朔郎先生は琵琶湖疏水の設計施工の最高責任者となり同工事を1890年（明治23年）に完成させた。その後1900年（明治33年）、創立してまだ3年の京都帝国大学理工科大学に教授として着任している。隣の建物に覆いかぶさるかの如く大きく育っているが、下から眺めると片方の枝が大きく切れ少し可哀そうである。田邊先生はどのような思いでヒマラヤスギをここに植えたのだろうか？様々な環境変化に耐えて生きる巨木が心地よい日陰を提供してくれる。ここに100年を超える大学の歴史を感じる。

（おちあい ちほ、大学院地球環境学堂准教授、専門は地域防災・災害復興）

[目次に戻る ↗](#)

探訪

このコーナーでは、職員が本学の研究施設等に実際に足を運び、現場での取り組みや職員が感じたことをレポート形式で不定期にお伝えしていきます。

理学研究科附属天文台 飛騨天文台 ～広報課員が行く～

北アルプスを間近に臨む岐阜県高山市の大雨見山（標高1,276メートル）の山頂付近。銀色のドームや塔のような建物などが長い渡り廊下でつながっている。理学研究科附属天文台の飛騨天文台だ。広い敷地には、太陽分光観測で世界屈指のドームレス太陽望遠鏡や、太陽全面の観測で世界最高性能を誇るSMART望遠鏡などが設置され、太陽地上観測の世界的拠点の一つとして、太陽活動の観測や研究を中心に行っている。今回は、飛騨天文台の協力のもと、8月20日に開かれた特別公開に同行取材させてもらった。



飛騨天文台

飛騨天文台は、自然の中で大気の透明度が高く、夜も周囲の明かりがほとんどないという観測にうってつけの立地環境を理由に、1968年に設立された。当初に花山天文台から移設された60cm反射望遠鏡に加え、1972年に65cm屈折望遠鏡が設置され、設立初期には太陽系内の天体観測が盛んに行われていた。その後、1979年にドームレス太陽望遠鏡、1992年に太陽フレア監視望遠鏡（2010年にペルーに移設）、2003年にSMART望遠鏡が増設され、太陽活動現象の観測や研究が主力となっていった。



SMART望遠鏡

今回取材で訪れた特別公開は、全国にある京都大学の教育研究施設で施設公開や公開講座などを実施する「京大ウィークス」の一環で開催された。昼の部と夜の部の2部制で、各部とも親子連れなど約25名が参加。あいにくの雨で、昼の部に予定されていた太陽の観測や、夜の部の天体観測は実施できなかったが、内部の施設見学などが行われた。

最初に見学したのは、65cm屈折望遠鏡。銀色のドーム状の建物内に入ると、高さ約11メートルもの望遠鏡の迫りに圧倒された。「東洋一の大きさを誇る屈折望遠鏡。約10メートルという長い焦点距離を活かして、惑星の観測に使われている」と、案内役の木村剛一 技術専門員が教えてくれた。これまでに、火星面における四季の変化、台風や雲の発生を捉えるなど大きな成果を挙げてきたという。実際の観測はできなかったものの、参加者は望遠鏡をのぞき込んだり、写真を撮影したりして楽しんでいた。



65cm屈折望遠鏡



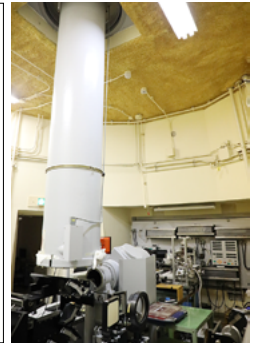
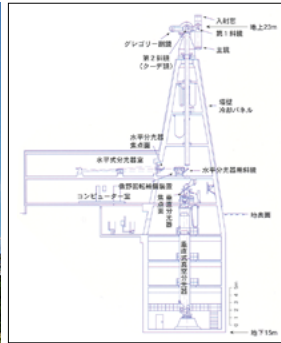
見学の様子

次に見学したのが、飛騨天文台の主力望遠鏡であるドームレス太陽望遠鏡。高さ23メートルの塔のような構造物全体が望遠鏡としての役割を果たしている。1979年に完成し、その後も

改良が重ねられ、世界トップクラスの性能を維持する。その大きな特徴の一つが、望遠鏡内部にある水平分光器室。太陽の光を虹色のスペクトルに分けて室内に映し出す。この日は実際には見られなかったが、太陽光を分光して映し出した光の帯には、所々に黒の線が縦に入るといふ。これは、光が太陽の大気を通過する際に、いろいろな元素が固有の波長の光を吸収してできるもので、「これらを調べることで太陽の大気の成分を知ることができる」と、上野 悟 助教が説明。ほかにも、光を波長ごとに詳しく調べることで太陽のガスの運動やその速さなど、さまざまな情報を得ることができるのだという。



ドームレス太陽望遠鏡と構造図 (右)



水平分光器室

教員による講演も行われた。昼の部では、前台長の一本 潔 教授が専門の太陽について講演し、「太陽フレアと呼ばれる大規模な爆発が10分間で放出するエネルギーは、人類が消費するエネルギーの20万年分にも及ぶ」と解説。夜の部では、現台長の横山 央明 教授が、太陽現象の仕組みをコンピュータでのシミュレーションを通して分析することについて話し、「どんな仕組みで現象が発生するのか、観測だけでは見えないところを見えるようにするのがシミュレーションの役割だ」と語った。

太陽は身近な天体だが、解明されていない謎は多い。「太陽フレア」がなぜ起こるのか。「コロナ」と呼ばれる太陽大気の上層部の温度が、表面温度の6,000度よりはるかに高い数百万度に達するのはなぜなのか。これらの理由ははっきりとは分かっていないという。

特に近年では、太陽フレアによって地球にもたらされる影響に注目が集まっている。フレアが発生すると、高エネルギー放射線や大量のプラズマの塊などが地球に押し寄せる。これらが大規模な停電や通信障害を引き起こすことなどが想定され、太陽活動の観測からこうした地球への影響を予測する「宇宙天気予報」の重要性が増しているのだという。「今後、観測の精度をさらに高めれば、予知にもつながる」と一本教授は語る。

横山教授は「飛騨天文台は太陽に関する観測データの蓄積は世界トップレベルだ」と話す。最近では、同じ附属天文台の岡山天文台で捉えられた太陽型の星の観測データを、飛騨天文台での太陽フレアの観測データと比較したところ、太陽型の星で、太陽フレアよりもさらに大きな爆発が起こっていたことが初めて分かったという。

「地球外の生命を探るうえで、太陽や太陽と似た星が周囲の惑星にどのような影響を与えるのかを知ることはとても重要だ」と横山教授。飛騨天文台の望遠鏡は、そんな天文学のフロンティアへと向けられている。

(広報課 (家城健太・藤島幸平))



講演の様子

[目次に戻る](#)

## 訃報

このたび、庄野達哉 名誉教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介します。

## 庄野 達哉 名誉教授

庄野達哉先生は、5月29日に逝去されました。享年92。

先生は、昭和27年3月京都大学工学部工業化学科を卒業、同大学大学院研究奨学生を経て、同34年4月同大学工学部助手、同年9月に同大学より工学博士の学位を授与され、同38年12月同大学工学部助教授となりました。昭和46年4月京都大学工学部教授となり、平成5年3月に停年により退官され、同年4月京都大学名誉教授の称号を受けられました。退官後は、平成5年4月から同11年3月まで近畿大学理工学総合研究所教授を務められました。

先生は、エレクトロオーガニックケミストリーに関する研究、高歪化合物に関する研究、その他の有機合成化学反応に関する研究、中でも電極反応を用いた有機合成化学の基礎と応用に関する研究において優れた研究業績を残され、その発展に寄与されました。これらの研究成果は、約300編の学術論文にまとめられ、国内外で高く評価されています。これらの業績に対して井上春成賞、科学技術庁長官賞(科学技術功労者)、日本化学会賞、有機合成化学協会賞、紫綬褒章、エレクトロケミカルソサエティ Organic and Biological Electrochemistry Division Manuel M. Baizer Award等、数々の賞を受賞されました。また、学外においては、日本化学会近畿支部幹事、電気化学協会関西支部幹事、日本学術振興会第116委員会委員、文部省学術審議会専門委員、電気化学協会エレクトロオーガニックケミストリー(電子有機化学)研究懇談会主査、さらに有機合成化学協会関西支部支部長、有機合成化学協会理事、日本化学会副会長等々を歴任され、学術行政に尽力するとともに学界の発展に大きく貢献されました。



(大学院工学研究科)

[目次に戻る](#)

京大広報  
No.764

令和4年9月25日 発行

発行 京都大学総務部広報課  
〒606-8501 京都市左京区吉田本町  
E-mail:kohho52@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

※ご意見・ご感想をお寄せください。  
「京大広報」の既刊号は、次のURLでご覧いただけます。  
<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/about/public/issue/kouhou/>

京大力、新輝点。



2022年、京都大学は創立125周年  
URL:<https://125th.kyoto-u.ac.jp>